

## 真剣に考えぬくこととは、こういうことなのか！

蓮池透『拉致』を読んで

望田幸男

蓮池透『拉致』(かもがわ出版、09年)を読んだ。いうまでもなく蓮池透さんは、拉致被害者薫さんのお兄さんで、「拉致被害者家族会」の事務局長をやっておられた人である。本書では拉致問題をめぐる日本政府の対応と北朝鮮の態度、「家族会」や「救う会」の反応や運動などが、それぞれの問題点についての的確に整理されている。そして拉致問題を解決するために、日本政府のとるべき方策、家族会や救う会、さらには広く国民世論のあり方について、適切かつ現実的な提言がなされている。北朝鮮制裁論にややもすると流されがちな世論に接することの多い今日、このように冷静で透徹した議論が、まさに渦中の人から聞かされたことは感動的である。ここには徹底して日朝の外交交渉を实らせるための必死の努力と必死の思考の結果が吐露されている。とりわけ北朝鮮をここまでかたくなにさせた日本政府の失態の数々が鋭くえぐり出され、軽はずみな北朝鮮制裁論が根底から批判されている。

私は昨年来、「非核の会」の仲間とともに「北東アジア非核地帯化」の運動を続けているが、それは憲法九条を改変しようとする「口実」を封殺するためと同時に、拉致問題を解決する道をも切り開くことを願って展開してきた。本書では大局的には、こうした運動方向と合致する提言が、拉致問題そのものの解決法として提示されたことを、心強く感じた次第である。

それにもまして、とくに私が心をゆるがされたのは、蓮池さんの冷静な分析や適切な提言を生み出した「心の構え」である。それは、蓮池さんが拉致被害者を肉親にもち、「被害者家族会」の中心的リーダーであった関係から、複雑で困難な拉致問題の解決の方途をさぐるために、必死の努力と必死の思考を重ねてきたことである。本書では人間というもの、なんとしても解決を迫られている問題に直面したとき、それに必死で立ち向かうならば、打開の大道を発見していくものだということを、あらためて教えてくれている。

この世には、さまざまな困難な問題に直面している人びとは多い。だが必死で努力と思考を重ねるならば、かならずや解決の道は発見されるものだ、このことを本書は印象深く語っている。